

歴史学における客観性と叙述性についての研究-ヘイ ドン・ホワイトのランケ論を中心として-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学社会科学研究所 公開日: 2012-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三宅, 正樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/12616

《個人研究》

歴史学における客観性と叙述性についての研究

——ヘイドン・ホワイトのランケ論を中心として——

三宅正樹☆

A Study on “Objectivity” and “Narrativity” in History: Around the Discussions on Leopold von Ranke by Hayden White

Masaki Miyake

1 問題の所在

歴史学における客観性と叙述性について、1973年、アメリカのカリフォルニア大学サンタ・クルス分校の歴史学の教授ヘイドン・ホワイトによって、画期的かつ衝撃的な問題提起がなされた。かれの大著『メタ・ヒストリー：19世紀ヨーロッパにおける歴史的想像力』は、歴史学においては学問としての客観性が史料批判によって確立できるのだ、というような安易な客観性信仰にたいする、真正面からの挑戦であり、このような客観性への確信に深刻な衝撃を与える性格のものであった。この大著のなかで、ホワイトは、19世紀ヨーロッパの代表的な歴史的著作が、いずれも叙述的性格を共通の特性として共有している事実を強調している。かれによれば、これらの著作には、四通りの「筋立て (emplotment)」の様式が見られる。すなわち、第一は「ロマン主義 (Romantic)」, 第二は「悲劇的 (Tragic)」, 第三は「喜劇的 (Comic)」, 第四は「風刺的 (Satirical)」の四つの様式である。かれによれば、これらの四様式に、四通りの「議論の進め方 (argument)」が対応する。すなわち、第一は「形式論的 (Formist)」, 第二は「機械論的 (Mechanic)」, 第三は「有機体論的 (Organicist)」, 第四は「文脈論的 (Contextualist)」である。さらに、かれによれば、これらの四様式は、「イデオロギー的な含蓄 (ideological implication)」の四様式に対応する。これらの様式は、第一は「無政府主義的 (Anarchist)」, 第二は「急進主義的 (Radical)」, 第三は「保守主義的 (Conservative)」, 第四は「自由主義的 (Liberal)」である。かれは、伝統的な詩学と現代の言語理論から、四つの比喩的な言葉の用法 (tropes) の理論を歴史学に導入しようとする。これらは、第一は「隠喩 (Metaphor)」, 第二は「換喩 (Metonymy)」, 第三は「提喩 (Synecdoche)」, 第四は「アイロニー (Irony)」である¹⁾。かれは、19世紀の歴史的著作を、これらの四つのトロップによって分類

☆本学政治経済学部教授

してゆく。かれによれば、19世紀の最も代表的な歴史家ならびに歴史哲学者は、ヘーゲル、ミシュレー、ランケ、トックヴィル、ブルクハルト、マルクス、ニーチェ、クローチェである。かれらのうち、例えばランケの「筋立て」は「悲劇的」というよりは「喜劇的」と分類するのがふさわしい。ランケは、歴史を「提喩」の様式で把握した⁽²⁾。ランケの歴史観は「有機体論的」であり、ランケのイデオロギーは「保守主義的」である。ランケの諸著作をこのように特徴付けたホワイトは、ランケが、「歴史が望むことを許される最高の説明は歴史過程の叙述的記述 (narrative description) である」と確信していた、と述べている。他方で、ホワイトは、ランケを崇拜した19世紀の歴史学者たちがランケこそ客観性 (objectivity) の権化であると断定した、その断定を誤りであると非難する⁽³⁾。

隠喩、換喩、提喩のそれぞれについて、ここで簡単な説明を加えておきたい。幸いに、『基本文芸用語辞典』のなかに、簡潔な解説を見いだすことができる。隠喩についての解説は次のとおりである。「a heart of stone (石の心—冷酷な心), eat one's words (自分のことばを食べる—前言を取り消す) のように、『石』の特性が『心』に、『食べ物』について言えることが『言葉』に転用されている。『石のように冷たい心』と転移の内容の明示されているものは直喩である⁽⁴⁾。」

換喩についての定義は次のとおりである。「一つのもの名称で、それから連想される、あるいはそれと密接な関係のあるもの名称を表わす方法。例えば『ホワイトハウス』で『大統領』、『白髪』で『老齢』を表わす⁽⁵⁾。」

提喩についての定義は次のとおりである。「部分で全体を、個人でその属する団体を、特殊で一般を表したり、逆に全体で部分を、一般で特殊を表したりする方法。たとえば有名な聖句、“Give us this day our daily bread.” の bread は、主食品、生計を表わす。また、ten mouths to feed (食べさせねばならない十の口—十人) のように『口』で『人』を表わし、逆に a pretty creature (可愛い娘) のように、『生物』で『その一部』を示す。全体と部分の関係がこの比喩の特徴⁽⁶⁾。」

歴史の叙述的性格を強調することによって、ホワイトは、歴史と文学、言葉をかえていれば歴史のなかの叙述性と文学のなかの虚構性とのあいだにある親近性に、われわれの注意を喚起する。このような議論は、われわれに、虚構性、叙述性、客観性の三者のあいだの関係をあらためて考え直すことを促している。

もうひとりのアメリカの歴史学者であるコーネル大学の歴史学の教授ドミニック・ラカプラも、かれが『史料主義的』な乃至は『客観主義的』な認識モデル (“documentary” or “objectivist” model of knowledge⁽⁷⁾)、或いは「史料主義型の歴史理解 (documentary mode of historical understanding⁽⁸⁾)」とよぶ、多くの歴史学者がそれによって「真実 (truth⁽⁹⁾)」に到達できると考えている行き方にはげしい批判を浴びせている。かれがホワイトを高く評価しているのは当然であるが、トロウプにこだわりすぎる議論の進め方に対してはかなり批判的である⁽¹⁰⁾。

本研究は、特にホワイトの問題提起を受けとめ、これを導きの糸としながら、歴史学における客観性と叙述性という、最近とみに注目されるに至った論点について、考察を深めることをめざすものである。

2 ランケの歴史学

歴史記述の客観性を確立する上で画期的な功績を挙げたと一般に考えられているのは、いうまでもなくランケである。従って、歴史記述の客観性について真正面から否定的な態度をとろうとするホワイトが、ランケとどのように対決するのかを観察することは、とりわけ重要であるといわなければならない。ホワイトは、『メタ・ヒストリー：19世紀ヨーロッパにおける歴史的想像力』（以下では『メタ・ヒストリー』と略記する）の第4章「ランケ：喜劇としての歴史的リアリズム」を、以下の叙述をもって始めている。

歴史叙述というプロフェッションの客観性の信条において規範となった一節で、プロイセンの歴史家レオポルト・フォン・ランケは、かれがその創立者であった歴史的方法を、サー・ウォルター・スコットのロマンスのなかに見いだされた表現の原則への対立ということで特徴付けた。ランケは、スコットが騎士道の時代について描いた画像に心を奪われていた。これらの画像は、かれのなかに、あの時代をもっと完全に知り、あの時代をもっと直接に体験したい、という欲求をかきたてた。こうして、かれは中世史の史料、すなわち、あの時代の文書と、当時の記述へと赴いたのである。かれは、スコットの描いた画像が、主として想像の産物であったことを発見しただけではなく、中世の実際の生活は、小説によるいかなる表現がそうであるよりも、さらにより魅惑的であることを発見して、衝撃を受けた。それ故に、かれは、これからは、かれ自身を史料の証拠によって証明された事実の表現に限定すること、かれ自身のセンチメンタルな性格のなかにある「ロマン主義的」衝動を押さえること、そして、歴史を過去に実際に起こったことだけを物語るという行き方で書くことを決断した。この、ロマンチズムとの絶縁は、リアリズムの歴史叙述という、ランケへの刻印の基礎であった。そして、この刻印は、マイネッケがこの用語を有名にして以来、「歴史主義」とよばれるようになったのであり、そして、この刻印は、いまなお、リアリスティックと呼ばれるのにふさわしく、またプロフェSSIONナルとして責任のある歴史叙述がそうであることをめざさねばならぬ在り方の規範であり続けている。

しかし、ランケの歴史の概念は、ロマン主義の拒絶よりもっと多くのものに基礎付けられている。それはまた、多数の、これ以外のものの拒絶にも取り囲まれていた。すなわち、ヘーゲルによる先験的な哲学化、当時の物理学や社会理論の実証主義学派のなかで優勢であった機械論的な諸原則、そして、公式の宗教的信条のドグマティズムの拒絶である。要するに、ランケは、歴史家に、歴史の領域を、その直接性、その特殊性、そしてその躍動において見るのを妨げる一切のものを拒絶したのである。かれが、リアリスティックな歴史の方法と呼ばれるのにふさわしい、とみなしたものは、意識に対して、それが、かれ自身の時代のロマン主義的芸術、実証主義的科学、そして理

想主義的哲学の方法を拒絶したあとに、為すべく残されているところのものであった。

このことは、ランケを解釈するひとびとのなかでの若干のひとびとが結論付けたように、ランケの客観性の概念が素朴な経験論者のそれに接近した、ということの意味するものではなかった。それ以来歴史主義と呼ばれるようになった世界観のなかには、それよりもっと多くのものが含まれていた。この世界観は、ランケの時代の学者の世界の特定の部門に固有の、多くの先入観によって基礎を固められていた。この世界観が、当時推進した「リアリズム」という特殊な概念を選別し、それを、ロマン主義、理想主義、実証主義の立場からの、「リアリズム」の概念 — これらに対抗して、この概念が世に送り出されたのであるが — から区別するために、私はそれを「教条的リアリズム」(“doctrinal realism”)と名付けようと思う。何故ならば、この概念は、リアリズムを、世界の性質とそのもろもろの過程についての、特定の先入観から由来したものでは全くない視点であるとみなしているが、現実には、そのような形態をとって、他と顕著に異なる「近代の」芸術、科学、哲学が出現する、それらの形態の意識的かつ一貫した拒絶によって「リアリスティックに」知られるのだ、という前提に立っているからである⁽¹¹⁾。

以上のように論じてきたホワイトは、当然予想される手続きとして、ランケの歴史の方法の、認識論的基礎 (epistemological bases of Ranke's historical method) の検討に入る。

1830年代に書かれた断片のなかで、ランケは、純粹に世俗的な人間の意識にとって達成が可能な、人間的な事柄についての知識を獲得する二つの方法について述べているが、そのうちの一つは「個体の認知を通じて」の方法であり、他の一つは「抽象を通じて」の方法である。第一のものが、ランケによれば歴史の方法であり、第二のものが、哲学の方法である。さらに、かれによれば、歴史家となるために不可欠な資質が二つある。一つは個体それ自体への愛であり、他の一つは「あらかじめ抱かれた理念」への抵抗である。個体についての熟慮を通じてのみ、世界全体の発展の経路が明らかになる、とかれは考えた。

しかしながら、ランケによれば、発展の経路は、哲学者のいう「普遍的概念」によって特徴が描きだされるものではない。歴史の課題は、単一の思想や単一の言葉によっては特徴付けられえないこの生命の観察である、とランケはいつている。同時に、世界がひとつの精神的な力によって支配されていることの証拠を提示していることも否定できない、とかれは考えた。かれによれば、この精神的な力のなかに、歴史の個体は最終的に、これらの個体が全体の一部となるような統一を見いだすのである。この「精神」の存在が、歴史は単なる「非情な力」の舞台より以上のものである、という信念を正当化する。そして、この精神がいかなるものであるかは、宗教的な意識によってのみ垣間見ることのできるものである。だが、この宗教的な意識を、個々の歴史上の問題を解くに際して引き合いにたすことは不可能である。しかし、世界についての、この宗教的な理解の昇華された形態が、部分と、部分の全体との関係を適切に理解するためには必要なのである。

このように、ランケによれば、歴史の著作はふたつの平面を同時に歩むものでなければならない。

すなわち、歴史の出来事のなかに働いている効果的な要因の探求と、これらの出来事の普遍的な関係の理解である。厳密な研究の命ずるところを守りながら、「全体」を理解する、ということこそ、理想的な目標である。普遍者とのきずなを失えば、研究は衰弱の道を歩む。従って、歴史の研究は、普遍者との関係によって損なわれることはない、とかれは考えた⁽¹²⁾。

ランケの考え方を、ここまで丹念にたどってきたホワイトは、これらのランケの発言が、ランケが心に描いた理想が、かれの研究においてかれを導いていた方法論上の諸原則をしばしば侵犯している事実を示している、と断言する。ホワイトは、フォン・ラウエのランケ研究を引用して、フォン・ラウエが、「ランケの歴史叙述の、より規模の大きい諸結論、かれの宗教的な陪音 (overtones)、ならびに、歴史の神聖な意図を把握しようとするかれの野心」と、かれの「方法」とを区別して、後者、すなわちかれの「方法」のほうが生き残ったのに対して、前者は拒否されてきた、と述べていることに注目する⁽¹³⁾。フォン・ラウエによれば、ランケは、「客観性についての共通の基準について基本的に意見が一致している歴史家たちの大きな学派をかれのあとに残した。アカデミックな歴史家たちは、今でもなお、至る所で、最もオリジナルな史料を批判的に研究すること、全ての細部を見抜くこと、そして、最も重要な事実から一般化と総合とに到達することの必要性を主張し続けている。かれらは今だに、客観性の理想と、歴史家が史料に服従するという理想にしがみついている⁽¹⁴⁾。」

ホワイトは、フォン・ラウエのこれらの指摘は全て正しいとした上で、なおかつ、これらの指摘は、次のことを十分に示していないという。すなわち、『客観性』、『批判的研究』、『細部を見抜くこと』、『最も重要な事実』の考察からの一般化の創出、といった諸概念が全て、それに基付いて、ランケがかれの史料研究から『導出したと主張する』、『より規模の大きい諸結論』の特性が弁護されうる真理とリアリティーの諸概念を、どの程度まで前提としているのか、その程度」を、十分に示していないというのである⁽¹⁵⁾。ランケは、もろもろのデータのなかで、意味のある証拠と意味のない証拠とを見分けるために、かれが適用した基準 (criterion) が適切なものであることについて、確信をもってしたが、歴史へのかれのアプローチを、実証主義者、ロマン主義者、理想主義者から区別すると、かれが考えていた、このようなかれの基準への確信こそが、保守主義的であると自由主義的であるとを問わず、またプロフェッショナルかアマチュアかを問わず、かれと同時代の歴史家たちに好まれたものなのである、とホワイトは論ずる。そして、ランケは、「リアリスティックな」歴史意識がどのようなものでなければならないかに関して、規範となったのである⁽¹⁶⁾。

ホワイトは、続けて次のように述べている。

ランケは、新しい時代の歴史叙述が、もしそれがかれの考える価値が奉仕することを要求していた諸目的に奉仕しなければならないとするならば、因果関係についての「機械論的 (Mechanic)」概念と諸価値ならびに崇高な諸理想に対する「アイロニカルな言外の意味 (Ironic implications)」をともなった「換喩の様式 (Metonymical mode)」を先ず手始めに拒絶することをもって始められなければならない、ということ直観的に把握していた。この拒絶は、事新しく弁護さ

れる必要はなかった。というのは、ヘルダーがすでに、この拒絶を正当化していたからである。さらにその上に、フランス革命とその後の反動とは、社会的現実へのいかなる抽象的なアプローチも、全て破産していることを確認したし、また、ロマン主義は、詩と芸術における人間の非合理的な衝動の正当化を示していた。しかし、歴史思想が歴史の分野を特徴付ける単なる「隠喩の様式 (Metaphorical mode)」に立ち返って、しかもなおランケがそれに対して承認した「科学 (science)」という称号がこれに付与されなければならないということは、もしこの称号が主観的な意見の有する権威よりもより大きな権威を主張することが許されるのだとすれば、不可能なことであった。同時に、歴史思想は、あまりにも性急に、「理解の喩の様式 (Synecdochic mode of comprehension)」へと押しやられることはできない。この様式は、それにとって「ロマン主義」それ自体だという告発が致命的であるのと同じように致命的であったであろうところの、「歴史主義」だという告発を是認しなければならない、ということなしに、歴史のシステムのなかの形式的な首尾一貫性の追求を是認するものであった。こういう訳で、ランケは、歴史の分野を「隠喩の様式 (mode of Metaphor)」においてあらかじめ示しておいた。この様式は、出来事の特異性と独自性、その生気にあふれた姿、多彩さ、多様さにおいての、出来事への第一次的な興味を是認し、そしてその後で、歴史の分野を形式的な首尾一貫性のある分野として、提喩として理解することを示唆した。この形式的な首尾一貫性のある分野の究極のないしは最終的な統一性 (ultimate or final unity) は諸部分の性質へのアナロジーによって示唆されえたのである。このことは、ランケをして、共時的 (synchronic) な (「実証主義的 (Positivist)」) 性質のものであれ、弁証法的 (dialectic) な (ヘーゲル的な) 性質のものであれ、歴史のなかに普遍的な因果的あるいは相関的な法則 (universal causal and rational laws) を探し求めねばならない、という仕事から解放したばかりでなく、歴史が望みうる最高の解明 (highest kind of explanation) は、歴史の過程の「叙述的な記述 (narrative description)」のそれであるということを信ずることを許した。ランケが見落としたのは、ひとは客観性の名において歴史へのロマン主義的なアプローチを拒絶することはできるかもしれないが、歴史が「叙述による解明 (explanation by narration)」と考えられる限り、ひとは、原型となる筋 (archetypal myth)、すなわち筋の構造 (plot structure) を叙述の課題とすることを要求されるのだ、ということである⁽¹⁷⁾。

3 歴史叙述と「筋」

ここで、ホワイトが使っている「筋」の概念について、若干の考察を加えておきたい。この概念についての示唆に富む説明が、フランスの哲学者ポール・リクールの大著『時間と物語』の最初の部分に提示されている。先ずフランス語の原文を掲げておきたい。

.... Lorsque Aristote, substituant le définissant au défini, dira que le *muthos* est «l'agencement des faits en système» (*è tôn pragmatôn sustasis*) (50 a 5), il faudra entendre par *sustasis* (ou par le terme équivalent *sunthêsis*, 50 a 5), non le système (comme traduisent Dupont-Roc et Lallot, *op. cit.*, p. 55), mais l'agencement (si l'on veut, en système) des faits, afin de marquer le caractère opératoire de tous les concepts de la *Poétique*. C'est bien pourquoi, dès les premières lignes, le *muthos* est posé comme complément d'un verbe qui veut dire composer. La poétique est ainsi identifiée, sans autre forme de procès, à l'art de «composer les intrigues²» (1 447 a 2)⁽¹⁸⁾.

英訳は次のとおりである。

.... When Aristotle, substituting the *definiens* for the *definiendum*, says that the *muthos* is “the organization of the events” [*è tôn pragmatôn sustasis*]” (50 a 15), we must understand by *sustasis* (or by the equivalent term *sunthêsis* [50 a 5]), not “system”, (as Dupont-Roc and Lallot translate it [p. 55]), but the active sense of organizing the events into a system, so as to mark the operative character of all the concepts in the *Poetics*.⁴ This is why, from the first lines, *muthos* is presented as the complement of a verb that means “to compose.” *Poetics* is thereby identified, without further ado, as the arts of “composing plots” (47 a 2)⁽¹⁹⁾.

最後に邦訳を掲げる。

アリストテレスが〈定義するもの〉を〈定義されるもの〉に置き換えて、筋（ミュトス）とは「出来事の組立て」（*è tôn pragmatôn sustasis*) (1450 a 5) である、と言うとき、*sustasis* という語を（あるいはそれと等価な語 *sunthêsis* 1450 a 5 を）、（デュポン＝ロックとラロが訳しているように *op. cit.*, p. 55）組織（système）としてでなく、『詩学』のあらゆる概念の操作的性格を強調するために、出来事の組立て（あるいは組織的組立て）として解すべきであろう。まさにそれゆえに、筋は最初の行からして、構成するを意味する動詞の目的補語として提示される。そこで詩学は、あっさりと、「筋を組み立てる」（1447 a 2）技法と同一視されるのである⁽²⁰⁾。

そして、フランス語の原文では註2、英訳では註4の箇所、いずれも筋と訳されているミュトスとプロット（plot）という言葉を理解するためには重要な事柄が記されている。先ずフランス語の原文での註を掲げる。

J'adopte la traduction Dupont-Roc et Lallot que je corrige sur un seul point, en traduisant *muthos* par *intrigue*, sur le modèle du terme anglais *plot*. La traduction par *histoire* se justifie;

je ne l'ai néanmoins pas retenue en raison de l'importance de l'histoire, au sens d'historiographie, dans mon ouvrage. Le mot français *histoire* ne permet pas en effet de distinguer comme l'anglais entre *story* et *history*. En revanche le mot *intrigue* oriente aussitôt vers son équivalent: l'agencement des faits, ce que ne fait pas le traduction de J. Hardy par *fable*⁽²¹⁾.

英訳の註4は、前半部分はフランス語の原文そのままの訳であるが、後半部分がフランス語の原文とはかなり違っている。参考までに掲げておく。

In the French text of this work I adopted the translation by Dupont-Roc and Lallot, only replacing *histoire* by *intrigue* for the word *muthos*. I did so because of the importance of "history" in the later chapters of this work. Here I will cite the recent translation by James Hutton: *Aristotle's Poetics*, trans. with an introduction and notes by James Hutton (New York: W. W. Norton & Company, 1982⁽²²⁾).

邦訳は次の通りである。

私はデュポン＝ロックとラロのフランス語訳を採用したが、ただ一点、*muthos* の訳は、英語の *plot* という語を手本にして、*intrigue* (筋) と訳して、彼らの翻訳を修正した。それを *histoire* と訳しても正当である。けれども私がそれを用いなかったのは、私の研究では歴史記述の意味の *histoire* が重要だからである。フランス語の *histoire* には英語の *story* と *history* の区別がない。それに反し、*intrigue* という語は、ミュトスと等価な「出来事の組立て」を直ちに志向する。それは J. Hardy の *fable* という訳ではできないことである⁽²³⁾。

リクールの文章をここでたどってきたことによって、ホワイトが使っている、*myth* や *plot* という言葉の意味もはっきりしてきた。*myth* を「神話」と訳すのは、ホワイトの文脈については、明らかに誤りである。ここでは、*myth* という言葉は、ギリシャ語の *mythos* を直接に受けている。リクールの述べている事柄から、この言葉は、出来事の「筋」を意味していることがわかる。英語の *plot* という言葉は、陰謀、計略という意味と、小説・脚本・詩などの「筋」という意味を兼ね備えている⁽²⁴⁾。他方で、フランス語の *intrigue* という言葉は、英語の *plot* と全く同様に、陰謀、計略という意味と、小説・脚本・詩などの「筋」という言葉を兼ね備えている⁽²⁵⁾。

ホワイトは、「ランケの歴史の方法の認識論的基礎」に続く「喜劇としての歴史のプロセス」という節を「喜劇の筋がランケの歴史の著作の大部分にとって筋の構造として、また、そのなかでこれらの著作のそれぞれがマクロコスモス的なドラマの個々の一幕として眺められるような枠組みとして役立つ」(The Cosmic mythos served as the plot structure for most of Ranke's historical works

and as the framework within which each of these works can be envisaged as an individual act of a macrocosmic drama.⁽²⁶⁾ という文で始めている。ここでは、mythではなしに、ギリシャ語の mythos という言葉そのものが用いられているが、いずれも「筋」という意味であることはいうまでもない。ホワイトは続けていう。

この筋は、ランケをして、かれの叙述する場面のひとつひとつの詳細に専念することを許したが、また、ランケをして、揺るぎない自信をもって、文書の洪水のなかを、証拠として意味のあるものと意味のないものとの確実な選択へとおもむかせた。かれが歴史の記録のなかで遭遇した紛争の全ての党派に対する、かれの客観性、批判的諸原則、寛容、そして同情は、必然的に調和のある解決へと向かうはずである、紛争の組合せとして、歴史の分野をメタヒストリカルに予想するという、その予想の、心の支えとなる雰囲気のなかで展開された。これらの解決とは、そのなかで、『自然』が最終的には、安定しているのと同じくらいに正当でもある『社会 (“society”)』によって置き換えられるというものである⁽²⁷⁾。

ついでホワイトは、ランケの叙述の典型として、『強国論』の一節を引用する。この箇所をドイツ語の原文から訳出すれば以下のとおりである。

諸国家、諸国民の、このような偶然の、ごちゃごちゃの混乱、折り重なってその襲撃、次から次への交替を、世界史は提示しているのではない。最初はおそらくそのように見えるのであろうが。文化の、しばしば、あれほど疑わしいものである推進が、世界史の唯一の内容だという訳でもない。われわれが、世界史の展開のなかで目にとめるのは、諸力、しかも、精神的な、生命をもたらす、創造的な諸力、それ自体生命であるものであり、道徳的なエネルギー (moralische Energien) なのである。これらのものを、定義したり、抽象化することはできない。しかし、それらを見たり、知覚することはできる。それらの存在への共感を、ひとはみずからのうちに抱くことができる。これらのものは、開花し、世界をとらえ、多様な表現のなかに立ちあられ、お互いにたたかい、制約し合い、圧倒し合う。それらのものの相互作用と連続、生命、それらのものの衰退と、常により大きな充実、より高い意味、より広い範囲をみずからのなかにはらむこととなる復活のなかに、世界史の秘密が存在する⁽²⁸⁾。

4 トロウプの様式としての「提喩」

ホワイトによれば、喜劇のもつ三部形式の動きは、見かけ上の平和から、紛争の発覚を経て、純粹に平和的な社会秩序の確立のなかでの紛争の解決へとむかう。このような、喜劇のもつ三部形式の動

きは、ランケをして、歴史の過程の総体がそれらに分割されうる主要な時間の諸単位を描くことを可能にした。しかも、その際のランケの態度は、自信に満ち、説得的なものであった。時間的な過程がこのように確実に筋立てされうるという事実は、ランケがかれ自身の時代の政治的、社会的な諸形態を、歴史分析の「自然な」諸単位として受容する際の、ランケの信念を強めた。ランケは、これらの諸単位によって、空間的、乃至は同時代的な構造として想定された歴史の領域を描いたのである⁽²⁹⁾。

ホワイトは、ついで、もう少し具体的に、ランケの考えた歴史の諸時期を考察する。西欧文化は、ランケにおいては、ローマ風、ならびにゲルマン風の文化的低層 (substrata) に分類され、さらにこれらの低層は、それぞれのなかの言語群に分類される。次に、諸国民のなかに、政治と教会の組織の特殊な諸形態が想定される。そして、諸国民それ自体のなかに、バランス・オブ・パワーの概念のなかに表現された、関係の特有の様相が、全ての諸国民のあいだの紛争の向かいつつあった終局の目標として要請される。部分は全体から分析され、全体は、実際に書かれた叙述において、諸部分から再構成される。その結果、部分が全体に対してもつ関係の漸進的な発現は、「なぜ事物はそれらが起こったかたちで起こったのかの理由についての解明」として体験されることになる⁽³⁰⁾。

そして、ホワイトは、このようなランケの歴史叙述のありかたと、かれのいう「提喻」との関わりについて、つぎのように結論付けている。

これらの解明の戦略を正しいものとして認可するトロウプ (比喩) の特徴付けの様式は「提喻」である。この比喩の「方法論の上での射影」 (methodological projection) は、歴史思想についての現代の歴史家たちが「歴史主義」 (Historism) と同一視した、あの「有機体論」 (Organicism) である⁽³¹⁾。

5 結論的考察

このように、ホワイトは、しばしば客観的歴史叙述の規範とみなされて高く評価されてきたランケについて、ランケは歴史につねに喜劇としての筋立てを付与していたのであり、また、部分が全体を比喩的に表現するという意味では、ランケにおけるトロウプ (比喩) の様式は「提喻」である、と断言している。すなわち、主観性を排除したという点で、歴史叙述の一方の極限に位置するとみなされてきたランケについて、その著しい主観性をえぐりだそうとした訳である。いわば、ランケについて、客観性の神話を破壊しようと意図していることになる。ランケについて、客観性の神話を破壊してしまえば、それ以外の、もともと主観性の強いとされていた歴史家たちについて、その主観性を強調することは、寧ろ容易であるといえよう。

客観的歴史叙述の規範とみなされるランケのなかに、歴史に対するオプティミズムが見いだされる

という事実は、しばしば、さまざまな形で指摘されてきている。村岡哲は、論文「ランケのオプティミズムについて」のなかで、ランケが、政治的な権力のなかにも常に何か精神的なものが存在すると考えていた事実を指摘したあとで、次のように述べている。

このようなオプティミスティックな見方の根底には、究極において、ランケの歴史観を担うところの独自の宗教が存在しているのであるが、同時にまた現実的に考えれば、彼は、ヨーロッパ諸国家の権力闘争を急激な破壊的戦争の破綻からまもるところの、ヨーロッパの全体感情というものを深く信じていた⁽³²⁾。

ここに触れられている、ランケにおける宗教の問題と、客観性の問題との関連に切り込んだのは、ドイツの近代史家ニッパードイであった。「それが本来いかにあったか」(Wie es eigentlich gewesen)を示す、あるいは自分自身を消し去って事柄自体をして語らせた、というランケのことばによって代表される客観性の要請と並んで、ランケにおいては、「あらゆる時代は神に直結する」、という断言に示された宗教性とが確立されていたことは、あらためていうまでもない。ニッパードイは、ランケの抱いていたような宗教的心情が消え去ったか、すくなくとも、ランケの時代とくらべて著しく薄れた現代において、いわば信仰なき客観性が成り立つのか、彼のいう「ポスト宗教」、「ポスト・レリギエーズ」(postreligiös)の時代において、ランケにおける客観性の要請をいかに評価すべきか、という問いかけを提起している⁽³³⁾。

ニッパードイがランケをめぐる提起した問いは、ホワイトのランケへの批判とやや異なった角度からのものである。ニッパードイのランケ解釈は、ホワイトが共感を籠めて引用しているフォン・ラウエの、ランケの「方法」は生き残ったが、宗教性は拒否された、というやや単純化した解釈とも異なっている。この関連で、アメリカの歴史学界のランケ受容が、国家の神聖化と結びついた宗教性を切り落とした形で、すなわち、まったくの誤解に基付いた形で、客観性の側面だけを受容するものであったとする、ピーター・ノーヴィックの指摘も興味深い⁽³⁴⁾。しかし、ここでは、このようなランケ論が、宗教に、晩年、深い関心を寄せていたと見受けられるニッパードイから提示されたという事実を記しておくにとどめておく⁽³⁵⁾。

ランケの史学に関して、ホワイトの指摘が全面的に妥当するかどうかは、膨大なランケの著作全般に即して検討してみなければならないことはいうまでもない。また、ホワイトの議論が、最近の文学理論に安易に依存している事実を批判することも、もちろん可能である。しかしながら、ホワイトが、無視することを許されない分析の一視角をあらたに提示したことだけは認識しておくべきであろう。

(1) Hayden White, *Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe* (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1973), p. 29. ホワイトによる最近の大きな著作とし

て、次の著作を挙げることができる。Hayden White, *The Content of the Form: Narrative Discourse and Historical Representation* (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1987).

- (2) White, *Metahistory*, pp. 31-38.
- (3) Ibid., pp. 178.
- (4) 武田勝彦・川端香男里監修『基本文芸用語事典』荒竹出版, 1980年, 25頁。
- (5) 同書, 52頁。
- (6) 同書, 165頁。
- (7) Dominick LaCapra, *History & Criticism* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1985), p. 17.
前川裕訳『歴史と批判』平凡社, 1989年, 17頁。
- (8) Ibid., p. 35. 同訳書, 36頁。
- (9) Ibid., p. 36. 同訳書, 40-41頁。
- (10) Ibid., p. 34. 同訳書, 39頁。
- (11) White, *Metahistory*, pp. 163f.
- (12) Ibid., pp. 164-166.
- (13) Ibid., p. 166.
- (14) Theodore M. von Laue, *Leopold Ranke: The Formative Years* (Princeton: Princeton University Press, 1950), p. 138; quoted by White, *ibid.*, p. 166.
- (15) White, *ibid.*
- (16) Ibid.
- (17) Ibid., pp. 166f.
- (18) Paul Ricoeur, *Temps et récit*, Tome I (Paris: Éditions de Seuil, 1983), p. 57.
- (19) Paul Ricoeur, *Time and Narrative*, Volume I, Translated by Kathleen McLaughlin and David Pellauer (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1984), p. 33.
- (20) ポール・リクール, 久米博訳『時間と物語 I 物語と時間性の循環 歴史と物語』新曜社, 1987年, 60頁。
- (21) Ricoeur, *Temps et récit*, Tome I, p. 57, note 2.
- (22) Ricoeur, *Time and Narrative*, Volume I, p. 237.
- (23) 久米博訳, 89頁。
- (24) 『岩波英和大辞典』岩波書店, 1970年, “plot” の項。
- (25) 『ロイヤル仏和中辞典』旺文社, 1984年, “intrigue” の項。
- (26) White, *op. cit.*, p. 167.
- (27) Ibid.
- (28) Leopold von Ranke, *Die großen Mächte. Politisches Gespräch*, Mit einem Nachwort von Theodor Schieder (Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1963), pp. 41f.
- (29) White, *op. cit.*, p. 177.
- (30) Ibid.
- (31) Ibid.
- (32) 村岡哲「ランケのオブティミズムについて」, 『近代ドイツの精神と歴史』創文社, 1981年, 339頁。
なお, 村岡哲「ランケ史学成立についての熟考」, 『レーオポルト・フォン・ランケ: 歴史と政治』創文社, 1983年, 参照。
- (33) Thomas Nipperdey, 'Zum Problem der Objektivität bei Ranke', *Leopold von Ranke und die moderne Geschichtswissenschaft*, Hrsg. von Wolfgang J. Mommsen (Stuttgart: Klett-Cotta, 1988), pp. 215ff.
- (34) Peter Novick, *That Noble Dream: The "Objectivity Question" and American Historical Profession*

(Cambridge, Mass.: Cambridge University Press, 1988), pp. 26-28.

- (35) ニッパードイのこのような宗教への関心を示す著作として、例えば次の作品が挙げられる。Thomas Nipperdey, *Religion im Umbruch: Deutschland 1870-1918* (Beck'sche Reihe 363, München: Beck, 1988).

(みやけ まさき)